

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏名 島津 哲子

論文題目

Factors Influencing Sustainable Efficacy of Smoking  
Cessation Treatment with Varenicline beyond Nine Months  
(バレニクリンによる禁煙治療開始後9か月以降の禁煙成功率と予測因子についての検討)

論文審査担当者

主査 委員

名古屋大学教授

八木哲也



名古屋大学教授

尾形能雄



名古屋大学教授

横井育平



名古屋大学教授

指導教授

長谷川好規



## 別紙1-3

## 論文審査の結果の要旨

今回、当院禁煙外来においてバレニクリンによる禁煙治療を行った症例について禁煙治療開始後9か月以降の禁煙成功率と予測因子について検討した。対象患者は2009年1月より2013年10月までに名古屋大学附属病院の禁煙外来を受診し、バレニクリンを用いて禁煙治療を行った206名である。のうち死亡例4名、重複受診例9名を除去した193名に対して、郵送におけるアンケート調査を行い、同意が得られた患者119名について禁煙外来終了時および禁煙外来終了後半年の治療成績とその予測因子について検討した。結果は、男性126例、女性67例、年齢中央値56.5歳(26~85歳)、基礎疾患を185例に認めた。アンケートの回収率は61.6%(119例/193例)であった。禁煙成功率は禁煙外来終了時(3か月後)48.7%であり、その後は1年後37.6%と緩やかに低下し、それ以降五年後まで横ばいで推移した。禁煙成功率は外来受診回数が多いほど上昇した。性別、年齢、TDS、CO、BI、BDI-II、基礎疾患の有無、精神疾患の有無にて無多変量解析の結果、禁煙治療における有意因子は若年であることと、BDI値の高いことであった。今後この結果を考慮した禁煙治療を行うことが重要と考えた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 禁煙外来通院中の2回目、3回目の外来受診時も喫煙をしている患者さんに対し、薬物療法の副作用の軽減に努めることや、医療スタッフとの面談を通じて禁煙できない理由の追及を行うことで禁煙が最終的にできた患者さんが禁煙外来終了時禁煙者95名中13名おり、患者さんの禁煙に対するモチベーションと薬物療法の効果、医療スタッフによるフォローが禁煙外来通院回数に影響し、持続禁煙率の高さに関係していると考える。
2. 今回の長期的な禁煙成績を見ると、1年目までは禁煙成功率は緩やかに低下し、その後平坦となっており治療開始後最低一年間のフォローが必要であることが示された。
3. アンケート結果で再喫煙の原因として、家庭や仕事でのストレスが15名、宴会の席での飲酒や同僚の喫煙行動と回答した患者さんが5名存在した。この結果を今後の再喫煙の予防に役立てていきたいと考える。
4. 今回の研究で、回答のなかった患者さんを禁煙失敗例としたのは、回答未回収者や同意を得られなかつた患者を喫煙者とすることでより厳密な禁煙率が得れると考えたためである。結果として、禁煙率をより厳密に解析できたと考える。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 別紙2

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	島津哲子
試験担当者	主査	八木哲也	長尾能雄	横井香子

指導教授 長谷川好規

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 外来通院回数と半年後禁煙率の関係における関与因子について
2. 持続禁煙を行うためのフォローする期間について
3. 再喫煙の原因について
4. アンケートに回答しなかった患者さんを喫煙者として対応した理由について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察能力を有するとともに、呼吸器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員会議の上、合格と判断した。